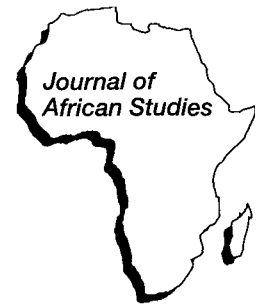


特集：アフリカ・モラル・エコノミーの現代的視角

市場経済とモラル・エコノミー

—「売却」と「分配」をめぐる相互行為の動態論—



京都大学大学院人間・環境学研究科 松村圭一郎

本稿は、アフリカの農村社会が直面する現代的状況をふまえ、本質主義的なモラル・エコノミー概念を超えて、複雑化する農民の経済行動を理解するための動態的視点を提起することを目的とする。とくに、非市場経済の領域で論じられることの多かったモラル・エコノミー的な経済行動が、商品作物栽培が拡大してきた農村社会のなかで、どのような位置を占めているのかに焦点をあてる。それによって、モラル・エコノミーか、マーケット・エコノミーか、という二者択一的な図式を相対化し、より動態的なモラル・エコノミー論の可能性を示す。エチオピアの農村社会の事例からは、人びとが「モノ」・「人」・「場」とそれらの関係で構成されるコンテクストに応じて、作物などの富の売却や分配を行っていることがわかってきた。人びとは「商品作物」と「自給作物」という属性に応じて経済行動を選択しているわけではなく、むしろ相互行為のなかで、それぞれの作物やそれをめぐる社会関係を「分配すべき富／関係」と「独占される富／関係」として位置づけあっている。市場経済が浸透した農村社会において、モラル・エコノミーは強力な原則として社会を覆っているわけでも、まったく別のものに置き換わってしまったわけでもない。それは、市場での商品交換とは明確に区別されるひとつの行為形式として存在し、人びとの相互行為のなかで顕在化したり、交渉されたりしているのである。

はじめに

本稿は、アフリカの農村社会が直面する現代的状況をふまえ、本質主義的なモラル・エコノミー概念を超えて、複雑化する農民の経済行動を理解するための動態的視点を提起することを目的とする。とくに、非市場経済の領域で論じられることの多かったモラル・エコノミー的な経済行動が、商品作物栽培が拡大してきたアフリカの農村社会のなかで、どのような位置を占めているのかに焦点をあてる。それによって、モラル・エコノミーか、マーケット・エコノミーか、という二者択一的な図式を相対化し、より動態的なモラル・エコノミー論の可能性を示す。

ジェームス・スコット (1999) に代表される「モラル・エコノミー」概念では、農民は市場経済になじまず、安全第一の原則でリスクを避け、コミュニティ内の生存維持の倫理をかたくなに保持している、とされてきた。こうした理解は、アフリカにおける農民の経済行動に関す

る議論のなかにも多くの共通点を見出すことができる。たとえば、ゴラン・ハイデン (Hyden, 1980) は、初期の著作のなかで、アフリカの小農経済の特質として、市場に依存せずに地縁・血縁をとおした自給的な経済領域を維持していることを指摘し、その特質を「情の経済」と名づけた。こうした「情の経済」や「モラル・エコノミー」という概念は、おもに市場経済化される以前の農民の経済行動を理解する概念として議論されてきた側面がある¹⁾。ただし、本特集で「アフリカ小農論争」について鶴田が指摘しているように、ハイデンは、アフリカ農民が自給経済と市場経済の双方に足をおいている状況を前提にしており、かならずしも自給自足の生活だけを維持していると主張しているわけではなかった (Hyden, 1986, 1987)。

現在、アフリカの農村社会を研究するときに、市場経済の影響をまったく無視することはほとんど不可能に近い。程度の差はあれ、おそらくハイデンが想定した以上に、農民の経済行動は商品作物の栽培や賃金労働、非農業分野での収入などに大きく依存しつつある。市場経済がより深く浸透した地域では、それまでのモラル・エコノミー的な社会関係が失われ、しだいに市場での自己利益の最大化を目指すような経済行動が幅広くみられるよ

うになっているのだろうか。現在のアフリカの農村研究において、市場経済化が進行する過程での「モラル・エコノミー」を検証することは、重要な研究課題になっている。

たとえば、杉村(2004)は、市場経済に依存を深めつつある農村社会においても、「情の経済」が示したような富の分配や共食という慣行の領域が維持されていることを指摘している。たとえ市場で獲得された現金であっても、コミュニティの成員や親族の病気などを通して分配され、富の平準化が成し遂げられる。そこでは、市場原理さえもが、モラル・エコノミー的なローカルの経済原理に取り込まれている実態が示されている。しかし、近代的な経済システムに対して、ある種の身体化された伝統的慣習が強固な持続性をもっているという説明枠組みには、「モラル・エコノミー」を変化にとぼしい本質的なものとして描いてしまう危険性がつねにつきまといっている。

こうしたモラル・エコノミー論の本質主義的な論調に対しては、初期の時点から批判が投げかけられてきた。たとえば、ポプキンがポリティカル・エコノミーの視点から指摘しているように、モラル・エコノミー論の多くは、その規範や文化的特質を所与のものとして想定しており、その規範が何に由来するのか、どのように現実の場面で作用しているのか、いかに分配が実践され、それが可能になっているのか、その動態的なプロセスをあきらかにしてこなかった(Popkin, 1979:16-17)。さらに、これまでの農村研究においても、富の分配や生存維持の倫理が、農村社会の文化的特質やモラル、伝統にもとづくと論じられることが多かった。「農村社会」そのものの性質が流動化している現在、農民の経済行動を農村社会の文化的特質をもとに説明する視点は、その方法論的な見直しを迫られている(Roseberry, 1989)。

現代のアフリカの農村部でわれわれが目にするのは、市場や資本主義的な生産活動とはまったく無縁だった貧しい女性世帯主が生活していくために小規模な商品取引をはじめの姿であり、あるいは逆に一部の農民が企業家的な才覚を発揮して資本主義的な経済活動に従事しながらも、日常的に多くの富を貧しい親族や隣人に分配しているといった姿である。これは、セイヤーが西洋社会の事例で指摘しているように、たとえ市場経済が高度に発達した社会であっても、人びとの経済行動が社会的なモラルや規範といったものから切り離されないことと同一の視点でとらえることができるだろう(Sayer, 2004)。ただし、このときの「モラル」や「規範」といったものを、伝統的な固有の論理という本質主義的な枠組みに還元せずに描くには、どのような記述方法をとることが可

能なのだろうか。

本稿では、エチオピア農村部におけるミクロな相互行為の場面を分析することで、この「モラル」や「規範」として理解されてきたものが、じっさいにどのように生成し、作用しているのか、その動態的プロセスを記述するための視点を提起したいと考えている。それによって、これまで対立的にとらえられることの多かった市場経済とモラル・エコノミーというふたつの原理が日常的な行為のなかで区別されながらも並存している状況を浮き彫りにしていきたい。とくに、「商品(換金)作物」や「自給作物」といわれるさまざまな栽培作物が、どのように農民の具体的な経済行為と関わっているのかに焦点をあてる。はたして、「商品作物」については市場経済原理にもとづく売買が行われ、「自給作物」に対しては、モラル・エコノミー的な贈与や分配が実践されているのだろうか。それとも、杉村が指摘するように、ともにモラル・エコノミー的な原理に組み込まれているのだろうか。市場経済の強い影響下にあるエチオピアのコーヒー栽培農村の事例をもとに、「商品作物」/「自給作物」という分類自体を批判的に検討しながら、「売却」と「分配」をめぐるダイナミックな相互行為のプロセスを分析していきたい。

本稿の事例は、エチオピア西南部に位置するゴンマ地方北部・コンバ村周辺での調査にもとづいている(松村, 2002, 2006)。この地域では、1950年代からプランテーションによる本格的なコーヒー栽培が拡大し、農民たちも積極的にコーヒーの植林をするようになった。農民のほとんどがコーヒー栽培に生計を依存しており、同時にトウモロコシ栽培を行うことで自給用の食糧を確保している。ほかにも屋敷地内では、タロイモや多年生キャベツ、ササゲ、エンセーテなど副食となる栽培植物のほか、オレンジ、バナナ、パパイヤ、マンゴといった果樹が小規模に栽培されている。こうした屋敷地の栽培植物は、世帯で消費されることも多いが、換金性が高いため、村の路上市(*qochi*)などでも販売されている。また、コーヒーにつぐ現金収入源となっているのは、チャット(カート)といわれる覚醒作用のある植物で、柵に囲まれた屋敷地内で栽培されることが多い。このチャットは現金で売買される商品作物であるだけでなく、とくにムスリムにとって、お祈りや農作業といった日常生活のなかで欠かせないものとなっている。

1950年代以降のコーヒー栽培の拡大、そして90年代の農産物流通の自由化にともなうコーヒー価格の高騰などをへて、村には多くの移住者が暮らすようになり、商店なども目にみえて増えてきた。コーヒーの摘み取りの時期になると、町からコーヒーを買い取りにくる商人や

精製工場の車がひっきりなしに訪れる。こうして市場経済に深く組み込まれるようになったひとつの農村社会の事例から、モラル・エコノミーの現代的な状況を描き出すための分析視角を提起したい。

1. 「売却」と「分配」のはざままで

調査村の屋敷地などで育てられているさまざまな作物は、あるときは村の路上市で売られたり、近所の者に分け与えられたり、そのまま食事のおかずになったりする。同じものでも、場合によって売却されたり、そのまま家族の者によって食べられたり、あるいは分配されたりする。こうした栽培植物の多くは、いわゆる「自給作物」や「換金作物」という固定的な分類には当てはまらない。それでは、どのようなときに作物は商品として売却されたり、自給用として家族で消費されたり、他者に分け与えられたりするのだろうか。いくつかの作物をめぐる事例をとりあげて考えてみたい。なお、以下の事例は、筆者が生活をともにしてきたムスリム・オロモ農民 A (60代男性) とその息子世帯 (B・C・D・E) を中心としたものにもとづいている²⁾。

1.1 他人に売られたサトウキビ

エチオピアの農村社会では、たくさんの収穫があった者は、つねに「分け与える」ことを期待されており、身近な親族から見知らぬ物乞いまで、さまざまな相手への食物分配が行われている (Matsumura, 2006)。人びとのあいだで「富をひとり占めしてはいけない」という圧力が働いているようにも思える。

同時に、人びとは「与えずぎると今度は自分が困ってしまう」というジレンマも抱えている。ときには、トウモロコシを分け与えるようたのみにきた物乞いが強い口調で追い払われる場面を目にすることもある。その一方で、そのまま売ればお金になるにもかかわらず、乞われるままにチャットなどの換金作物が他者に振る舞われることも多い。こうした微妙なジレンマのなかで、人びとはどのように「分け与えること」と「与えずに利益を得ること」のバランスを保っているのだろうか。「商品」になりうる作物は、いかに「分配」の圧力を逃れて「商品」として売られているのだろうか。ある偶然に目にした出来事から、その問いを考える糸口が見えてきた。

<事例1 サトウキビの分配を回避する>

2002年12月のこと。農民Aの三男Dが屋敷地で栽

培していたサトウキビが大きく育ってきた。サトウキビは、村の路上などで細切れにして売られる。とくに子供たちには手軽なおやつとして人気が高い。あるとき、Dは成熟してきたすべてのサトウキビを一度にある同世代の青年に75ブル(約1000円)で売却してしまった。その青年は、毎日、サトウキビをそこから刈り取っては小学校の前や村の大通りで売っていた。青年がどれだけの売上高をあげたのか、はっきりとはわからなかったが、少なくとも120ブルから150ブルにはなるほどの本数であった。遠くの町の商人に売却するのなら話はわかる。しかし、すべてのサトウキビは村の中で売られていた。不思議に思い、Dに「なぜ自分で刈り取って売ろうとしなかったのか?」とたずねた。そのほうが当然、多くの利益を手にすることができると思ったからだ。すると彼からは予想もしなかった答えが返ってきた。「うちのサトウキビが大きくなってきたのを見たり、その噂を聞きつけたりして、たくさんの人が分けてくれないかと言ってきた。そんなとき、『ああ、それがじつは、ちょうどこのまえ、税金の支払いに困って売ってしまったんだよ』と答えればいい。もし、彼に売っていなければ、今ごろ少なくとも10人には分け与えていて、もうなくなってしまっていたはずだ。少ない額でも人に売った方がずいぶんとましだよ」。

もし、サトウキビを自分の手もとにおいたままにしていたら、それはすぐに「分配」の対象として親族や村の知人などに分け与えなければならなくなる。そこで、熟してひとに乞われる前に売却するという方法がとられたのである。この事例から3つのことがわかる。

ひとつめは、欲しいといってひとから乞われると、サトウキビのように「商品」になりうる作物であっても、分け与えざるをえなくなるということ。もし、分け与えなくてもよい、乞われても簡単に断れるというのなら、わざわざ安い値段で売ったりする必要もなかったはずだ。そして、ふたつめは、このサトウキビの事例では、現金が「分配」の領域の外に位置していたということである³⁾。前もって他者に売却してしまうことで、サトウキビという富を現金にかえ、「分配」の領域からはずすことができた。サトウキビを売って現金にかえても、かえなくても、それが土地から生み出された富であることに変わりはない。もし、なんであれ「富」を分配しなければならぬのであれば、作物を売却して得た現金も、人から乞われて分け与える対象となってしまう。しかし、そうはなっていない。いったん作物が現金へと置きかわってしまうと、だれも「よこせ」とはいえなくなる。そこには、何らかのかたちで区別されるふたつの経済領

域、「分配される富」と「独占される富」があるようだ。みつつめは、サトウキビをめぐって「分け与えるべき関係」と「分け与えなくてもよい関係」との区別が顕在化しているということである。農民Dがサトウキビを売却したのは、親族関係にない同年代の青年だった。このとき、青年が農民Dにサトウキビの購入をもちかけたことで、彼らは「経済的他者」として金銭を介した取引を行う関係におかれることになった。そして、この分配関係とは区別される「経済的他者」を介することで、Dは、サトウキビを「分配される富」の領域から「独占される富」の領域へと転換することができたのである。こうした事例は、他の作物についても観察された。

1.2. とりつくされるオレンジ

A家の裏庭には、数本の大きなオレンジの木があった。オレンジが実る時期には、親族の子供たちが毎日のように木によじ登ってもぎとっていた。筆者もよくそんなオレンジを分けてもらったり、子供たちと一緒に食べたっていた。それが「誰のものか」など考えることはなく、家族みんなで食べていいものだと思っていた。

<事例2 オレンジを売却する>

2002年12月ごろのこと。Aの四男Eの知人2人が、穀物袋をさげてA家にやってきた。オレンジの木によじ登り、いっせいに果実を地面に落としはじめた。「このオレンジをまるごと買い取った」のだという。それを見て、三男のDは「Eが売ってしまったんだ。あとでB〔長男〕ともめろぞ」とこぼした。よく聞いてみると、この木は長男であるBが若いころに植えたものだという。現在、長男Bは父親や兄弟たちのコンパウンドとは別の場所に家を構えている。Eは、次のように説明した。「オレンジをこのままにしていたら、子供たちが食べつくしてなくなってしまふ。これを売ったお金は自分のものにするんじゃない。父親の税金を払うためにつかうんだ」。

筆者や子供たちだけでなく、家族の多くの者がこのオレンジをとって食べていた。そんなとき、それが「誰のものであるか」といったことが口に出されることはなかった。しかし、ひとたびそれが金銭におき換えられるという段になると、その富が誰の手におさまるかということが争点になるのだ。

Eは、自分の家の裏庭にあるオレンジがしだいにとりつくされていくのを、やきもきしながら眺めていたことだろう。しかし家族や子供たちに、それを食べるなどは言えなかった。自分だけが少しずつとって売ることでもできなかった。彼は一度に「親族以外の他者に売却する」

という行為で、親族への無秩序な「分配」の状態に終止符を打ったのである。E自身も、兄のBがこのオレンジを植えたことは認識していた。だからこそ、オレンジを売り払って得たお金は自分のものにするのではなく、「父親の税金の支払いにあてる」ことでその行為の正当性を主張したのだ。家族という関係のなかでは、その富を誰が手にするか、分配されるべきか、売却されるべきか、売却されたら誰がその対価を手にするか、つねに争いと交渉の相互行為が繰り返されることになる。

この事例からは、「オレンジ」というひとつの作物が商品として売却されたり、自由に家族の者が食べられる分配の状態におかれるかは、けっして固定的なものでなく、流動的なものであることがわかる。さらに、サトウキビの事例と同じく、ここでも家族が自由にもぎとって食べるという「分配される富」の状態を解消するために、一度に家族以外の者に売却するという方法がとられた。分配対象だった家族とは別の経済的他者を介在させることで、「分配される富」が貨幣という「独占される富」へと転換されたのである。この事例からは、彼らが「分配される富」の社会関係と「独占される富」の社会関係を異なるものとして明確に区別していたことがわかる。

1.3. カネをうみだすコーヒー

コーヒーは、乾季の間に白い花を咲かせたあと、緑色の小さな固い実をつける。それがしだいに赤く色づいてくると、最初の収穫時期となる。この「赤コーヒー (*buna diima*)」は、基本的に輸出用とされ、外皮と果肉を取り除いて乾燥させる「精製」を行うために、工場に出荷される。赤コーヒーが実りはじめると、村にはコーヒーを買いつける精製工場の車が毎日やってくるようになる。村の大通りには、この季節だけの赤コーヒー市がつくられ、村の商人が農民たちのもちよるコーヒーをその場で秤にかけて買い取る。この時期、農民の家を訪ね歩きながらパンや日用品を売る行商人などが町から訪れ、村は活気にあふれる。ところが、この赤い実も2週間ほどでやがて乾燥して黒っぽくなっていき、最後には地面に落ちる。この「乾燥コーヒー (*buna gogga*)」は、国内消費として出荷されたり、家庭で消費されるために用いられる。赤い実がなくなるころには、精製工場からの車も姿を消し、村の商人が乾燥コーヒーを買い取って町まで運ぶようになる。

こうして栽培されているコーヒーは他の作物とは大きく異なっている。一般的に、摘み取られたコーヒーが分配されたり、「贈物」として与えられることは、ほとんどない。コーヒーは、「贈物」とは対極に位置する「商品」の領域にある作物だといえるのかもしれない。まず

表1. トウモロコシとコーヒーの比較

比較要素	トウモロコシ	コーヒー
贈与・分配	おもな <i>zaka</i> (喜捨) の対象	ほとんど喜捨の対象にはならない
労働力の調達	収穫：親族・隣人と労働交換	草刈：面積あたりの賃金払い、摘みとり：出来高払い
利益の分配	世帯単位で消費される	摘み取った個人のものになることが多い
土地の相続	男性のみで相続される	女性にも分与される (兄弟に売却されることが多い)

出所：筆者作成

簡単に自給用の作物であるトウモロコシと比較してみよう (おもな特徴を表1に一覧として示した)。

トウモロコシがつねに「分け与える」対象になっているのに対し、コーヒーが贈与や分配の対象として与えられることはほとんどない。とくに「赤コーヒー」であれば、ほとんどの場合、摘みとったあとすぐに売却される。「乾燥コーヒー」の場合でも、貯蔵されて、自家消費されるほか、雨季のお金に困ったときなどに売却される。一方、ふつう喜捨 (*zaka*) の対象として考えられているのは、トウモロコシである。なかには、収穫したトウモロコシを売却してしまう者もいるが、この「トウモロコシを売る」という行為は周囲の者から非難されることが多い。農民たちのあいだには、主要な食糧であるトウモロコシを安易に売ることへの抵抗感が根強くみられる。

さらに、その労働力の調達についても違いが大きい。トウモロコシの収穫作業では、多くの場合、親族の援助や労働交換 *dado* といった金銭を介さない方法で労働力が確保されている。それに対し、コーヒーについては、草刈りが面積に応じた現金払い (1ファチャーサ=30ブル) で行われ、摘みとり作業 (とくに赤コーヒーの場合) も、キロあたりの出来高払いで行われることが多い。

また、トウモロコシが食事をともにする世帯全体で消費されるのに対し、換金されたコーヒーの利益は摘みとった個人が自分のものにするのが少なくない。土地の相続に関しても、トウモロコシの畑が男性中心に相続されるのに対し、コーヒーの土地は女性にも相続される。このとき、コーヒー林が細分化しないように、女性が男兄弟に自分の相続した面積分を売却したり、その相続分の利益を女性に現金で配分したりする。こうした相続方法は、トウモロコシの畑では行われない。コーヒーの土地が、より現金に「換算」されやすいことがわかる。

こうして比較すると、トウモロコシとコーヒーとでは、その「現金」との関係に大きな違いがみえてくる。トウモロコシが世帯単位で消費されつつ、世帯外へも分配されるのに対し、コーヒーは現金化されるために、その富が労働力の提供者以上にひろがっていくことは少ない。ここでも、現金化された富が他人に与えずに独り占めされやすい富であることがわかる。

しかし、その一方で、飲むコーヒー (*kawa*) となると、話しが違ってくる。コーヒーを沸かすとき、自分たちの世帯だけで飲むということはまずありえない。コーヒーの用意ができると、その家の若い女性や子供などが特定の近隣世帯をまわって、「コーヒーを飲みに来てください」と声をかける。世帯Aの場合であれば、同じコンパウンドにある4世帯 (A・C・D・E) と隣接するAの弟世帯などの間で互いに声かけられる。また、その場にたまたまいた人や通りかかった人なども招かれる。人が集まったところで、世帯主や年長の男性がお祈り (*buna jaba* = 「コーヒーを強くする」の意) を捧げ、女性が「おちょこ」のような小さなカップ (*siini*) にコーヒーを注いでみなに振る舞う。だいたい1人3杯から4杯ほどお代わりをして飲むことが多い。こうした習慣はエチオピアで広くみられ、一般的に「コーヒー・セレモニー」と言われている。

農民Aのコンパウンドでの8日間の観察事例からは、毎日、どこかの世帯がコーヒーを沸かしており、多いときには1日5回ものコーヒー・セレモニーが行われていることがわかった。ひとつの世帯に呼ばれてコーヒーを飲んだあと、すぐに別の世帯でコーヒーを飲むこともある。喧嘩をしている世帯などの間では、声をかけなかったり、声をかけられても応じなかったりする。参与観察を行ったときには、BとDが少し前にもめたことを引きずっていたため、その世帯間 (世帯Bと世帯D) では人の往来がなかった。日常的に顔を合わせれば会話などもあるが、コーヒーのときは特別のようだった。コーヒー・セレモニーに招き、招かれる関係は、親密さの表現でもある。「コーヒーを呼びあう仲」という範囲が、世帯や家族にならぶ重要な社会関係の単位となっているといえるだろう⁴⁾。

売却されてカネになるコーヒーの実も、輸出用の商品ですぐに売却される赤い実と、自家消費や雨季に売却される黒い実とでは、その位置づけに違いがある。そして、いったん「飲むコーヒー」になってしまうと、「商品」の領域にあるとはいえないような、きわめて社会性の強いものになってしまう。ただし、村人はコーヒーを毎日のように飲むことへの執着が強いいため、家にコー

ヒー豆のストックがない場合などは、赤コーヒーであっても、わざわざ乾燥させて、自給用に使用することもある。また乾燥コーヒーであっても、値段が高いときまで貯蔵しておいて売却される場合もある。同じ作物であっても、モノとしての性質やそれを取り巻く状況が変わることで、「分配される富」と「独占される富」という経済領域のあいだで意味を転換させ、その経済的な価値や社会的意味づけを変化させるのである。

1.4 カネと神につながるチャット

コーヒーにつぐ現金収入源となっているのが、チャットといわれる覚醒作用のある植物である。この植物は柵に囲まれた屋敷地内で栽培されることが多い。村のメインロードの一角には、チャット小屋がつくられ、農民から買い集めたチャットが売られている。このチャットは、とくにムスリムにとって、儀礼や社会生活を営むうえで欠かせないものとなっている。

たとえば、村でひとが死ぬと、死後1週間は家族が喪に服するための小屋 (*mana taaziya*) がつくられ、そこにたくさん村人が訪れる。このとき、とくにその家族がムスリムであれば、チャットをもっていくことがもともと「ふさわしい」とされる。ふつうチャットは、その場にいる最年長者やイスラームの知識がある者に手渡される。そして、その者がチャットを両手でもちながら神に祈りを捧げたあと、集まっている者に数枝ずつ分配する。ムスリムがお祈りにあわせて両手を顔の前に掲げて「アーメン」と声を出すとき、その場にいるキリスト教徒は黙ってじっとしているが、最後には、ムスリムもキリスト教徒も囁む者にはチャットが分けられる。

服喪という場面に限らず、神に祈りを捧げるときや社交の場では、チャットは欠かすことができない。イスラームの安息日とされる金曜日の午後に家族や友人たちと過ごすとき、精霊が宿るとされる大木の下で祈祷 (*duai*) をおこなうとき、あるいは結婚式やイスラームの儀式的なかで、さまざまな場面で、きまってチャットが神への祈りとともにみなに振る舞われる。たしかに売ればいい現金収入源になる「商品」でありながら、社交的な場面ではお金を介さずにみなに分け与えられるべきものになっている。そこにはやはりジレンマが潜んでいる。

<事例3 売られなくなったチャット>

Dは、屋敷地の一角でチャットを栽培していた。2001年に村を訪れたとき、Dはチャットの葉が茂るたびに、村の商人や仲買人にチャットの畑ごと売却していた。1度に120ブルから200ブル(約1600円~2700円)といった値段で売却すると、商人とその雇われ人たちが、必要

に応じてチャットの葉を摘みとっていく。Dはチャット畑の雑草を取り除いたり、土を掘り起こしてやわらかくしたりして、熱心に手間をかけて世話をしており、かなりの収入源になっているようだった。しかし2002年に村を訪れたとき、Dのチャット畑はすっかり荒れ果て、ほとんど葉も茂っていなかった。そしてけっきょく一度も売られることはなかった。Dに「なぜチャットを売らなくなったのか?」と問うと、次のような答えが返ってきた。「弟の結婚式があったり、C(村に戻ってきた兄)がいつも勝手に中に入って摘んでしまうので、大きく育たなくなった」。

彼自身もトウモロコシの収穫作業のときは、自分のチャット畑からチャットをあつめて、作業にあつまった者に手渡していたし、父親が村で亡くなった人の弔問に行くというときには、その畑からチャットを摘んで渡していた。2001年に村を訪れたときは、こうした家族などへの分配をしながらも、なるべく他の者が入り込むのを排除して、商人に売却することができていた。その定期的な売却を可能にしていた秩序が、弟の結婚式や村に戻ってきた兄の登場で崩れることになったのである。弟の結婚式に集まった人びとに振る舞うため、兄として自分のチャットを提供するしかなかったことも、村に戻ってまもない兄が自分のチャット畑に入って摘んでいるのを見て見ぬ振りするしかないのも、その心情は理解できる。むしろ家族を排除して定期的に売却できていたことのほうが、特殊な状態だったのかもしれない。

ひとことで「商品作物」といっても、農村社会のなかでは「分け与える」こととの微妙なバランスのなかで「売る」という行為が成り立っているのがわかる。それぞれの作物には状況に応じて特定の意味が付与されており、その意味をうまく転換できなければ、富を自分だけのものにするのは難しい。そして、そこには作物をめぐる人びとの相互行為や社会関係といったものが大きく関わっている。

富を蓄積して「豊かになる」ためには、そして豊かな者が豊かでありつづけるためには、農村社会のなかで「分け与える」圧力を巧妙に避けることが求められる。どんなに貨幣経済が浸透してマーケットが整備されても、土地から生みだされる富が「商品」として店先で売却されるまでには、親族や近隣の者などの「分配」の期待をふりきって「商品」になるための一線を越えなければならない。次に、なにがモノを「商品」にしているのか、さらに事例を分析しながら整理していこう。

2. モノ・人・場を位置づけよう

ここまで、村で栽培されているさまざまな作物が、状況に応じて商品作物のように売買されたり、あるいは自給用として消費されたり、親族や知人に分配されていることをみてきた。作物は、かならずしも最初から「商品作物」や「自給作物」となるわけではなく、人びとの社会関係や相互行為によって「独占される富」と「分配される富」というふたつの経済領域のあいだを行き来していた。ここでは「モノが商品になる」ということを作物以外の事例からさらに考えてみたい。

2.1. モノが商品になるとき

これまで見てきたように、商品交換は、つねに市場経済の存在を前提とし、近代的な経済様式とつよく関連づけられてきた。しかし、そもそも「モノが商品になる」ということはどういうことだろうか。まずは、あらかじめ「商品」といえないようなモノが商品として扱われる事例から考えてみたい。いったい何がどのようなときに「商品」となるのか。

<事例4 ダンボールの切れ端のゆくえ>

2003年10月。筆者が植物採集のために用意していたダンボールを適当な大きさに切りそろえて、残りの切れ端を部屋の隅に投げる。と、それを見ていた隣に住む10歳の少年が「もらっていい?」と聞く。少年は、その切れ端をもって庭に出て行く。しばらくすると、同じコンパウンド（屋敷地）に住むC（30代半ば）が、切れ端を手に歩き回っている少年の姿を見て、妻にこう告げる。「10サンティム払って、買い取ってこい」。Cの妻は、少年を呼びつけ、10セント硬貨を渡して、ダンボールの切れ端を受け取る。「なんでわざわざサンティムを払ったのか?」とたずねると、Cは「お金をやらないと、そんな簡単には渡してくれないからだ」と答えた。

少年が手にしたダンボールの切れ端は、Cによってあたかも「商品」であるかのように買い取られた。この事例のポイントは、ダンボールの切れ端が「商品」になることが予想外なことだったというだけでなく、C（成人男性）と10歳の少年という親族関係（Cからみて父方平行イトコの息子）にある者のあいだで金銭の授受が行われたということだった。

ふつう成人男性と親族の少年とのあいだで、モノが売買というかたちでやり取りされるケースはほとんどみられない。しかし、モノによっては、こうした親族関係にある親密な関係においても金銭の授受をとまなう「商品交換」が行われうることを示している。

この事例から、商品／非商品がつねにいかなる場合にも商品／非商品でありつづけるわけではないことがみえてくる。マルクスの商品交換論のポイントも、モノは最初から商品になるわけではなく、交換によってはじめて「交換価値」というものを生じさせ、「商品」になるということだった。「交換価値は、まず第一に量的な関係として、すなわち、ある種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される比率として、すなわち、時と所としたがって、たえず変化する関係として、現われる。したがって、交換価値は、何か偶然的なるもの、純粹に相対的なるものであって、商品に内在的な、固有の交換価値というようなものは、ひとつの背理のように思われる」（マルクス、1969:70）⁵⁾。

この議論のポイントは、モノに内在する価値があつて「商品」になるのではなく、モノは交換される関係においてはじめて「商品」となるという点である。それ以上の交換可能性が失われると、そのモノは「商品」ではなくなる。つまり、どのようなモノであれ、たとえある人にはゴミでしかないものであつても、交換関係におかれれば「商品」となる。さらにいうと、「商品」があつて「商品交換」が成り立つのではなく、「商品」に先立つものとして「商品交換」がある、とも言えるだろう。

事例4のように、ひとつのモノが「商品」として扱われたり、「非商品」となったりすることは、かならずしも社会関係（親族か／非親族かなど）だけに依存しているとは言いきれない。それでは、どのような要素が重要になってくるのだろうか。

2.2. “場” のもつ力

サトウキビやオレンジの例にもあつたように、なんらかの社会関係が「分配すべき関係」とみなされたり、「分配しなくてもよい関係」と考えられたりすることは確かだ。それが、「独占される富」の領域と「分配される富」の領域というふたつの経済領域に重なっているようにも思える。ただし、この「社会関係」も、かならずしも固定的なものとはいえない。

農民Aの四男Eは、農業にはあまり熱心ではなかつた。妹の夫といっしょに小作としてトウモロコシなどを栽培していたが、なにかと理由をつけては畑仕事をさぼりがちだった。あるとき、村の大通りに面した一区画の家が、借家人を探しているというのを聞いて、筆者に相談を持ちかけてきた。「あの場所にスーク（小商店）を開いて、商売をはじめたい」と。彼にはずっとお世話になってきたこともあり、結局、筆者の出資で、町からタバコやサンダル（線香）、食用油、石鹼などをひと通り買いそろえて、彼は商店経営をはじめることになった。

＜事例5 母親は商売相手か？＞

イスラームの断食月（ラマダン）が近づくと、Eはサブサ（三角形の揚げ物）をつくって売り始めた。最初、筆者はサブサづくりを手伝いながら、そのまま揚げたてをもらって食べたりしていた。ある日、Eの母親が店にやってきた。コーヒーを摘んで得たサンティム硬貨を手に、サブサをひとつ買うという。Eが当然、タダで渡すだろうと思っていると、彼は「そういうわけにはいかない」と言って、お金をとろうとする。あわてて筆者が「母親に売りつける気なのか！」と声をあげると、Eは「これは商売の鉄則だ」と、頑としてゆずらない。それで母親もお金を渡そうとするので、けっきょく筆者がお金を払って家族全員の分をEから買い取ることにした。

彼らの親密な母子関係を見慣れていたため、どんなに商売上のことでも、貧しい母親にサブサを買いとらせるという行為には違和感を覚えた。しかし、商店という場においては、明確な線引きがなされる必要があったようだ。いくら同じ親密な社会関係であっても、商店で販売される「モノ」に対しては、商品交換のモードが厳格に維持されていたといえる。そして、この事例において、筆者とDとの関係も微妙な変化を経験することになった。最初は、サブサ作りを手伝いながら分け与えてもらう関係にあったものが、筆者がお金を払ってサブサを買い取ることで、筆者とDとの関係は「売買」の関係を引きはじめた。この事例のあと、筆者もサブサをつまみ食いするのを控えるようになったし、定期的にDからサブサを買い取るようになった。サブサをめぐる一連の相互行為の結果、商店という場での筆者を含む社会関係が定義／再定義されていったのである。

Eが商店をはじめて1年あまりがたち、ふたたび村を訪れると、彼の店が閉め切ったままになっていた。どうやら家賃を払えなくなって、大家から出て行くように告げられたらしい。そして、次のようなことがあった。

＜事例6 家に持ち帰られた石鯰：モノの脱商品化＞

商店がうまくいかなくなり、店にならんでいた石鯰や線香などの日用品の売れ残りは、Eの家に持ち帰られていた。ラマダン月がはじまる前日、Eの妹が、彼の家に立ち寄って、「石鯰ちょうだい」とせがむ。Eは、1ブル（約15円）の石鯰を3個あたえる。それをみた父親は、すぐにEのところに行き、「これから毛布を洗いに行く」といって、石鯰を3個もらった。

たとえば、Eがまだ商店をやっていたとき、父親が店にいった、「毛布を洗うから石鯰をくれ」といっても、サブサを買わされる母親と同様、とりあってもらえなかっただろう。しかし、石鯰のおかれた場が商店から家になることで、その関係が一変する。この事例のポイントは、同じ「モノ」が場所を移しただけで、「商品らしさ」を失っている点にある。同じ親族などの社会関係にあっても、「商店」から「家」へと場が移ることで、「モノ」をめぐるコンテキストが切り替わる。「モノ」の「商品化」は、それがおかれる「場」にも大きく依存しているといえる。

いくつかの事例から、さまざまなコンテキストによって、モノが商品になったり、脱商品化したりすることを示してきた。それでは、こうした議論は、これまでの経済人類学の議論とどのように接合し、いかに新しいことがいえるのか。

2.3. モノ・人・場が支える経済行為—「社会に埋め込まれた経済」を超えて

経済人類学の影響のある議論に「社会に埋め込まれた経済」というものがある。この議論が仮想敵としているのは、経済学者や形式主義人類学者などが主張する「社会から切り離された経済」という視点である⁶⁾。たとえば部族社会であっても、標準的な経済学の定式によってその経済行動の分析が可能と考える形式主義に対して、実体主義の人類学者は、前近代的な部族社会では、経済は社会関係に埋め込まれ（embedded）ており、近代の市場経済社会とは別の原理が働いていることを主張してきた⁷⁾。

とりわけ、大きなインパクトを与えたのが、「経済人類学」の先駆者でもあるカール・ポランニーである。彼は「社会に埋め込まれた経済」が本来の社会のあり方だとして、そこから切り離された自律的市場によって、人間生活全般が規定されるようになった近代の社会システムを批判している（ポランニー、1975）⁸⁾。

この「社会に埋め込まれた」という場合、人類学ではとくに「社会関係」との関連が強調されることが多かった。形式主義—実体主義論争に一石を投じたサーリンズ（1986）も、社会的な関係の距離に応じて互酬性の形態が異なることを指摘しており、社会関係が経済行為を支える重要な要素であるという立場をとっている⁹⁾。また、ブロックとパリーは、このサーリンズの社会関係に依存した互酬性の議論を、社会秩序の再生産に関わる長期サイクルと、個人的競争をとまなう利己的な短期サイクルのふたつの秩序領域へと読みかえた（Bloch & Parry, 1989）。ただし、とりあげている事例のなかでは、長期

サイクルが首長などとの伝統的秩序の社会関係と関連づけられ、短期サイクルが未婚の交差イトコという両義的な社会関係と結びつけられるなど、経済行為を規定するものとして社会関係の重要性を強調する視点は根づよく残っている¹⁰⁾。

本稿でこれまで示してきた事例のなかでも、たしかに「社会関係」が富の所有や分配という経済行動を考える際に重要になるケースも多かった。しかし、それは他の要素との相対的な関係にあり、作物などの富の扱われ方は、むしろ「モノ」・「人」・「場」とそれらの関係（「場」－「人－人」－「モノ」）によって異なる様相を呈すると考えられる。たとえば、「商店」という場では、「息子と母親」という社会関係であっても、「サンブサ」は「商品」として扱われる。あるいは、「家」という場における「家族」のあいだでは、「オレンジ」は分配の対象として家族が自由に食べてよいものだったが、「村の商人」という経済的他者を介することで、「オレンジ」が「商品」となる。経済行為は、必ずしも社会関係だけに埋め込まれているわけではないのだ。

「モノ」・「人」・「場」それぞれの組合せに応じて異なるコンテキストが生み出され、そこにはひとつひとつの「ふさわしい」行為形式が関連づけられる。もちろん、この複雑なコンテキストの推移のなかでは、ある「モノ」の位置をめぐる解釈にずれや交渉可能性が生じており、あるコンテキストがどのような意味をもち、どのような行為がふさわしいとされるかは、つねに交渉の余地を残している。そのため、ある人にとっては、富が分配されるべきコンテキストだと思える場面であっても、別の人にとっては個人が独占して当然だという主張がなされることもある。

たとえば、事例6の「石鹼」をめぐる事例でも、石鹼をとりまくコンテキストが、「商品交換」の形式から「分配」の形式へと転換したことは、かならずしも誰もがはじめから認識を共有していたわけではない。商店で売ろうとしていた「商品」の在庫がそのまま家に持ち帰られるという状況は、Eにとっても、父親や妹たちにとっても、はじめての経験だった。そこで、この「石鹼」をどのような「モノ」として扱うべきなのかは、微妙な問題だったはずだ。

たとえば、Eが商店から自分で「購入」した「石鹼」であれば、それを家族が分けてくれとせがむ状況は考えにくい。そもそも、自分で購入するときには、そのとき（洗濯などのために）必要となる以上の数の石鹼が買われることはない。このケースが特殊だったのは、とりあえず使うあてのない複数の「石鹼」が、突然、「商店」から「家」へと場を移したというところにある。ただ、それだけで

は、石鹼に「分配」の形式が適用されることが確定したわけではなかった。妹が兄に「分けてちょうだい」とせがみ、それに兄が応じたことで、はじめてこの石鹼というモノが「分配」の位置にあることが確認され、父親もつづいて分けてくれるようたのむことができた。石鹼というモノの位置づけは、こうした相互行為のなかで、行為遂行的に、事後的に、「商品交換される富」から「分配される富」へと転換されたといえる。特定のコンテキストに関連づけられた行為の形式である「規範」とは、こうした相互行為の結果として、一時的にある「かたち」をもつものなのだ。

もちろん、そのあとで、親族でない者がEに石鹼を分けてくれるようたのんだとしたら、Eがどのような反応を示すかによって、それが「親族」のあいだで分け与えるべきものなのか、もっと広い範囲でも分配されるのか、その「モノ」の「分配されるべき範囲」が浮かび上がってきただろう。そして同時に、Eとその者との関係が、親密なのか、それほどでもないのか、その「社会関係」の性質が定められることにもなる。一度、定義されたはずの規範も、さらに別の相互行為が重ねられることで、微妙に変質したり、調整されたりしながら、つねに少しずつ「かたち」を変えているのである。

つまり、上で図式化したような「モノ」・「人」・「場」でつくられるコンテキストとそこに結びつけられた行為の形式は、かならずしも固定的ではなく、いくつもの行為の積み重ねのなかで操作されたり転換されたりするものなのである。その意味では、人びとの行為は、ある特定のコンテキストによって一方的に導かれるのではなく、行為そのものがまた別のコンテキストとして、あらたな別の行為へと連鎖していくといえるだろう。

これまで、「社会に埋め込まれた経済」という議論では、経済行動における「社会関係」の重要性が強調されることが多かった。そこでは既存の「社会関係」が過度に本質化されてきたともいえるだろう。しかし、本稿が扱ってきた事例をふりかえてみると、「モノ」・「人」・「場」それぞれの関係によって構成されたコンテキストが、農民の経済行動を考えるときに重要であることがみえてきた。これらの複雑なコンテキストの推移に応じて、「売却」と「分配」という異なるふたつの行為形式が、相互行為のなかで適用されたり、交渉されたりしていくのである。

3. 差異の形式としてのモラル・エコノミー

人類学においては、「贈与交換」というテーマがつねに主要な研究課題のひとつであった。トロブリアンドの

クラヤ北米北西岸のポトラッチにはじまり、メラネシアやマイクロネシアなどオセアニアを中心としたさまざまな研究が蓄積されてきた。そこでは、西洋社会の「商品／市場経済」とはまったく異なる「贈与経済」が描かれ、いわゆる新古典派経済学の提示する利潤最大化の人間像が相対化されてきた。

なかでも大きな影響を与えたのが、モースがとりあげたマオリ社会の *hau* という観念である (Mauss, 1990)。贈られたモノが最初の所有者とのつながりをいつまでも保持しつづけて切り離されることがない。これが贈与経済におけるモノと人との関わりをとらえる重要な概念になった。そしてそのモノのあり方が、商品経済のなかで賃金労働者によって生産され、その存在から切り離されている「商品」と対置されることになる。

しかし、こうした「贈物」と「商品」の対置は、モースの本来の意図に反して¹¹⁾、「未開社会＝贈与経済」と「西洋社会＝商品経済」という単純な二項対立的な枠組みを強化する結果になった。あたかもメラネシアの人びとが「商品」とは無関係な生活を送っているかのような、あるいは逆に、西洋の人びとが「商品」だけに囲まれて生きていくかのような対立的イメージをつくりだしてきた (Carrier, 1998)。そして、この図式は、商品経済を伝統的な農村共同体の生活原理とはかけ離れたものとして描いてきたモラル・エコノミー論とも密接につながっている。「未開社会＝贈与経済」と「西洋社会＝商品経済」という二項対立の図式は、「農村社会＝自給経済／モラル・エコノミー」と「西洋近代＝市場経済」という構図とほぼ一致している。

しかし、こうした西洋近代と対立するものとして「贈与経済」をとらえる視点は、これまでも批判の対象となってきた¹²⁾。たとえば、ブロックとパリーは、次のように述べている。「多くの人類学者が見いだしてきたような贈与交換と商品交換が立脚している原則のあいだの根本的な対立は、ある意味でわれわれの贈与のイデオロギーが市場交換に相反するものとして構築されてきたためである。純粋に利他的な贈与という観念は、純粋に功利主義的な交換の観念とコインの裏表の関係にある」 (Bloch & Parry, 1989: 9)。

エチオピアのコーヒー栽培農村においても、富を分け与えるという行為が日常的になされる一方で、コーヒーなどの売却をとおして貨幣を媒介とした富の獲得と蓄積が行われている。本稿では、「贈与経済」と「商品経済」の概念的な差異や共通性について検討するのではなく、農民がつくりだす富＝作物の日常的な扱われ方に注目することで、ひとつの社会のなかでふたつの経済領域が、どのような相互関係を保ちながら並存しているのか、そ

の動態のプロセスを分析してきた。

じっさいの事例をみていくと、作物という富が、そのときどきで「分配される富」と「独占される富」というふたつの経済領域のなかに位置づけられていることがみえてきた。それは切り離された別個の領域というわけではなく、区別されることではじめて意味を定義し合うような「差異の形式」としての関係にある。

それぞれの作物の位置づけは固定的なものではなく、つねに流動している。コーヒーの事例にもあるように、あるモノ自体は「分配」の対象にも「商品」にもなりうる存在であって、必ずしもどちらかのラベルをつけることはできない。あるモノの価値や意味づけが最初からあり、それが集合して、ひとつの経済領域を構成しているのではなく、ふたつの経済領域という形式があって、モノがコンテクストに応じて、あるいは相互行為のなかで、その領域のどちらかに位置づけられるのである。これはマルクスが論じたように、商品があって商品交換が行われるのではなく、商品交換によって商品が生まれるという議論と同じ関係にある。人びとは、相互行為を繰り返しながら、それぞれのモノをどちらかの形式に属するものとして位置づけ、そして今度は位置づけられたモノによってその行動のあり方を拘束されているのである。

ただし、そこには、コンテクスト自体が操作されたり転換されたりする可能性がつねにある。人びとが換金用でつくっていたはずの作物が、売られずに分配されたり、あるときはおもに自給用だったはずの作物が家族に分け与えられることなく売却されたりする。そのとき、サトウキビやオレンジを売却した事例のように、そこに「分配」の対象とは異なる「経済的他者」を介することで、「分配される富」の領域にある作物を「独占される富」の領域に転換するような手順がふまれていた。ある別の要素を介させることで、そのモノをとりまくコンテクスト自体を変質させ、「分配される富／関係」を「独占される富／関係」へと操作的に転換していたのである。

エチオピアの農村社会では、土地から生み出される富はつねに「分け与える」圧力にさらされている。しかし、分け与えられたり売られたりするモノに注目してみると、与えずに利益を独占するための「売る」という行為の相対的な位置づけが浮かび上がってくる。それは、「分け与える」こととまったく切り離された別次元の領域として存在しているというよりも、それとつねに関係しつつも区別されるものとして並存しているのである。そこでは富の分配を支えるモラル・エコノミーは、商品交換とつねに対置されるかたちで、あるいはそれとの差異というかたちではじめて取り出すことのできる行為の一形式だといえるかもしれない¹³⁾。

おわりに—モラル・エコノミーの動態的理解に向けて

これまでのモラル・エコノミー概念は、ある社会の経済行動の様式を支える原理として概念化されてきた。そこで暮らす人びとは、そのモラル・エコノミー的な原理を内部化しており、それにもとづいた行動をする。その行動の様式は、多くの場合、市場経済や資本主義経済といった近代的な枠組みとは対立・背反するものとして、あるいはそれを超克するものとして描かれてきた。しかし、現在のアフリカ農村が直面している複雑な状況を考えるとき、こうしたある社会集団の経済行動が固有のモラル・エコノミー的な行動原理にのみ根ざしているという視点は、あまりに静態的な理解でしかない。

このモラル・エコノミー論につきまわってきた本質主義について、近年のハイデンの議論も、動態的な視点をとりこんだものに転換している (Hyden, 2004)。本特集で翻訳されている論稿においても、ハイデンは「情の経済」の概念を国家や市場というフォーマルな制度に対する (あるいはその外部での) インフォーマルな対応のあり方として拡張しており、その現れ方には、垂直関係／水平関係、排他的／包括的という軸に応じて、4つの形態 (Clientelism, Charisma, Pooling, Self-defense) があらうことを示している。これは、アフリカの「情の経済」が何らかの本質的な固有性 (たとえば、小農的生産様式や平等主義) を固持しているというよりは、その社会的アリーナや状況によって、まったく異なる形態をとりうることを示唆している。彼は「情の経済」を「もっと自由自在で、プラグマティック (実用主義的) で、競争的なもの」とらえ、さらに、そのプラグマティックな規則について、「何が可能かという限界を設定する隠れた規範的枠組みの中で、戦術的に構想され、適用される」(本特集の P.38-39) と述べている。

本稿がエチオピア農村社会のミクロな事例分析から提示してきたのは、モラル・エコノミーをある種の共有された文化として描くのではなく、モノ・人・場とそれぞれの関係のなかで参照されるひとつの行為形式としてとらえる視点である。経済人類学の議論のなかで優勢だった、「社会関係に埋め込まれた経済」も、あるコンテキストをつくりだす複数の要素のひとつにすぎない。人びとのひとつひとつの相互行為の積み重ねは、モノ・人・場によって構成されるそれぞれのコンテキストとある行為形式との結びつきを強化し、ある種の「規範」をかたちづくっていく。そして、ひとつの形式が「ふさわしい」ものとして相互に参照されたり、交渉されたりすることで、人びとはある一定の行為へと導かれる¹⁴⁾。こうし

た視点をとることで、はじめてモラル・エコノミーが依拠してきた「規範」が、相互行為のなかで変化していくという動態的な側面を示すことが可能になるのである。

古典的なモラル・エコノミーの議論は、農民のあいだで資本主義や市場経済とは相容れないある種の文化的特性が強く維持されてきたことを主張してきた。それに対して、モラル・エコノミー論を批判してきたポリティカル・エコノミー論も、個人がつねに利益や効用、コストとベネフィットを考慮するような「合理的な計算の経済」を唯一の原則として描いてきた。しかし、これらの立場は、ふたつの相容れない原理の「どちらか」にもとづいて人びとが行動していると仮定している。

本稿がここまで論じてきたのは、これらのふたつの原理は、ひとつの社会のなかでともに観察される行為の形式であり、かならずしも人びとが「どちらかだけ」に依拠して行動しているわけではない、ということであった。たとえ市場経済の影響力がつよまっても、モラル・エコノミーが強力な原則として社会を支えつづけるわけでも、まったく別のものに置き換わってしまうわけでもない。むしろそれぞれのコンテキストに応じてどのような規範がふさわしいものとして参照され、それらがいかにかに人びとの相互行為のなかで顕在化したり、回避されたりしているのか、そのプロセスを描きだすことが、モラル・エコノミーを動態的に理解するために重要な視点なのである。

アフリカを研究する多くの人類学者は、これまで農村社会の特徴を市場経済や資本主義経済の外に位置するものとして描くことが多かった。しかし、市場経済の影響を無視できなくなった現在、人びとが市場の原則を受け入れつつも、それとは相容れない原則も同時にふまえながら生きている現実を把握していかなければならない。モラル・エコノミーの議論も、現代アフリカの流動的な社会状況のなかで、人びとがいかにかに複雑なコンテキストを位置づけ、読み替えているのか、その経済行為の潜在的な可変性を理解していく必要があるといえるだろう。

注

- 1) のちにハイデン (Hyden, 1983) が展開した議論のポイントは、アフリカの小農的な行動様式が、現代のアフリカの政治や行政など近代セクターのなかでも持続性をもっていることを指摘することにあつたことは注意しておく必要がある。
- 2) 農民世帯 A の親族関係などについては、松村 (2006) を参照のこと。
- 3) 調査村において現金がまったく分配されていないわけではない。村では、しばしば病気などで貧窮した者が村人に金銭

の援助を乞う催し (*irdatal gargarsa*) が行われることがある。このとき呼びかけ人は、村の各世帯に貧窮の理由と期日を書いた紙を配り、その日に紅茶やコロ (大麦などを炒ったもの) などを用意して待つ。訪れた村人は家の入口で記帳して、現金を渡す (2ブル~5ブル程度が多い)。この催しはコーヒーの収量が多く、村人が現金を手に行っている時期に行われる傾向にある。コーヒーの実りのよかった 2005 年には、村で 10 世帯ほどがこの催しを開き、なかには 1500 ブル (約 2 万円) あまりを集めた者もいたという。現金を「分配される富」として扱うためには、こうした特別の場が設けられる必要があるといえる。

4) 観察事例の参加者をみると、おもに女性のほうが頻繁に参加していた。主催者を含めた参加者総数のうち、68% は女性によって占められている。昼間、男性は畑仕事などで外に出ていることが多いため、コーヒーを飲みながら世間話をするということが、女性たちにとっての憩いの時間になっている。さらに訪問客が来たときにコーヒーがふるまわれることも多く、コンパウンド内の人間関係だけでなく、コーヒーをともに飲むということが社交的な場に欠かせない要素になっていることがうかがえる。

5) マルクスは、別の箇所においても、生産物が「交換」によってはじめて「商品」になることを繰り返し述べている。「物によっては、有用であり、また人間労働の生産物であって、商品でないばあいがある。自分の生産物で自身の欲望を充足させる者は、使用価値をつくるが、商品はつからない。商品を生産するためには、彼は使用価値を生産するだけではなく、他の人々にたいする使用価値、すなわち、社会的価値を生産しなければならぬ。(中略) 商品となるためには、生産物は、それが使用価値として役立つ他の人に対して、交換によって移譲されるのでなければならない。」(マルクス, 1969:77-8)。「亜麻布は自分自身価値であることを、実際には、上衣が直接に自分と交換しうるものであるということをつうじて、表現するのである。一商品の等価形態は、それゆえに、この商品の他の商品にたいする直接的な交換可能性の形態である」(マルクス, 1969: 103)。

6) 形式主義者の議論のポイントについて、グラノヴェッターは以下のようにまとめている。「1920 年代からは、一部の人類学者が同じような立場をとった。彼らは『形式主義者』といわれ、部族社会であっても経済行為は社会関係からは十分に独立しており、標準的な新古典派の分析が有効であるとするものである。この立場は、最近になって、あらたな流れを受け入れてきた。(略) それらの多くは、『新制度派経済学』といわれるものに含まれる。彼らは、かつての初期社会においても、われわれ自身の社会であっても、埋め込まれていたと解釈されてきた行為と制度について、合理的で、多かれ少なかれ細分化された個人の利益追求の結果として理解したほうがよいと論じている」(Granovetter, 1985: 482)。

7) この「経済が社会に埋め込まれている」という立場には長い歴史がある。たとえば、人類学者に大きな影響を与えたヘンリー・メインの『古代法』では、社会の近代化とともに「身分から契約へ」の進化が起きたことが述べられている。これ

は、近代化とともに、社会 (関係) 内で固定された「身分」から、合理的に判断して「契約」によって (一時的/個別的に) 結ばれる個人へと分化したという議論である (Maine, 1917)。ただし、このメインの場合、人びとが社会関係から埋め込まれていた状態から解放されたことを肯定的にとらえている。

8) ポランニーは、その著書のなかで、以下のように述べて人間の経済が社会関係から切り離されて存在しているという形式主義的な議論を批判している。「最近の歴史学や人類学的研究におけるきわだった発見によると、人間の経済は、一般に、人間の社会的諸関係のなかに沈み込んでいるということである。人間は物質的財貨を所有する個人的利益を守るために行動するのではない。人間はみずからの社会的地位、社会的権利、社会的資産を守るために行動する。人間は、この目的に役立つ限りでのみ物質的財貨に価値を認めるのである」(ポランニー, 1975: 61)。

9) サーリンズ (1984) は、惜しみなく与える「一般化された互酬性」、等価物の直接的な交換を意味する「均衡のとれた互酬性」、損失なしに相手から最大限に奪おうとする「否定的互酬性」の 3 つの分類を示し、これらが交換しあう人びとの社会的距離に応じて、親族など親密な関係にある者の間には「一般化された互酬性」が、他民族やよそ者との間には「否定的互酬性」、その中間に「均衡のとれた互酬性」が成り立っているとした。

10) たとえば、ピオット (1991) も、トーゴの Kabre についての論文のなかで、彼らの交換領域が社会関係に根ざしていることを強調して、次のように述べている。「われわれはモノよりも人に価値を置くとしてくり返し特徴づけられ、モノがつねに (社会) 関係に転換されてきた社会に関心がある。(中略) わたしは、いかに Kabre の交換領域が、…ある種の交換関係を特定し、階層を秩序づけているかを記述する。これらの (社会) 関係はじっさい、それぞれの領域に関連している特定の産物と人の交換をとおして生成しているが、Kabre にとってもっとも重要なのは、その交換の (社会) 関係的な含意である」(Piot, 1991: 409)。

11) モース自身は、『贈与論』のなかで、近代的な生活のなかでも物は市場価値だけでなく、なお感情的価値をもっていると述べ、すべてが完全に売買による商品交換だけに包摂されているわけではないことを指摘している (Mauss, 1990:65)。

12) 人類学の「贈物 (gifts)」と「商品 (commodities)」に関する議論には、次のようなものがある。量的で譲渡可能な「商品交換」と質的で譲渡不可能な「贈与交換」との概念的区別を強調したもの (Gregory, 1982)、「贈与交換」と「商品循環」という対立的にカテゴリー化されてきた現象を支える原理に共通性 (広義のポリティクス) があることを指摘するもの (Appadurai, 1986)、モノはその文化的な意味づけによって、差異化されて交換が不可能な完全な「単独化 (singularization)」という状況から、単一の交換領域において等価交換がくり返される完全な「商品化 (commoditization)」の状況までの幅をもち、現実の社会や個々のモノはその両極のどこかに位置づけられるとする議論 (Kopytoff, 1986) など。

- 13) 小田は、ほとんどの社会には分配・贈与交換・再分配・市場交換の4つのタイプがすべてみられ、人びとがそれらの異なるゲームをブリコラージュ的に区別しつつ接合させていることを指摘している(小田, 1994)。多くのアフリカの農村社会においても、市場経済化以前からそれぞれのタイプが並存していたと考えられるが、それを論証的に示すのは、本稿の範囲を超えている。
- 14) 分配など人びとの経済行動をある方向へと導くときのひとつの誘引として、感情をとまなうインタラクションに注目する必要があると考えられるが、これについては、別稿、Matsumura (2006) を参照のこと。

参考文献

- Appadurai, A., (1986) "Introduction: Commodities and the Politics of Value. In A. Appadurai (eds.), *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 3-63.
- Bloch, M. and J. Parry, (1989) "Introduction: Money and the Morality of Exchange". In J. Parry & M. Bloch (eds.), *Money and the Morality of Exchange*, Cambridge: Cambridge University Press, pp.1-32.
- Carrier, J., (1998) "Property and social relations in Melanesian anthropology", In C. M. Hann (ed.), *Property Relations: Renewing the Anthropological Tradition*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 85-103.
- Granovetter, M., (1985) "Economic Action and Social Structure: The Problem of Embeddedness", *The American Journal of Sociology* 91(3):481-510.
- Gregory, C., (1982) *Gifts and Commodities*. London: Academic Press.
- Hyden, G., (1980) *Beyond Ujamaa in Tanzania*. Berkeley: University of California Press.
- Hyden, G., (1983) *No Shortcuts to Progress: African Development Management in Perspective*, London, Heinemann.
- Hyden, G., (1986) "The Anomaly of the African Peasantry," *Development and Change*, 17: 677-705.
- Hyden, G., (1987) "Final Rejoinder," *Development and Change*, 18: 661-7.
- Hyden, G., (2004) "Informal Institutions, Economy of Affection, and Rural Development in Africa", *Tanzanian Journal of Population Studies and Development*, 11(2): 1-20.
- Kopytoff, I., (1986) "The cultural biography of things: commodization as process. In A. Appadurai (eds.), *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.64-90.
- Maine, H., (1917) *Ancient Law*, London, J. M. Dent & Sons Ltd.
- 松村圭一郎, (2002) 「社会主義政策と農民-土地関係をめぐる歴史過程: エチオピア西南部・コーヒー栽培農村の事例から」, 『アフリカ研究』 61: 1-20.
- 松村圭一郎, (2006) 「土地の『利用』が『所有』をつくる: エチオピア西南部・農村社会における資源利用と土地所有」『アフリカ研究』 68:1-23.
- Matsumura, K., (2006) "Moral Economy as Emotional Interaction: Food Sharing and Reciprocity in Highland Ethiopia", *African Studies Quarterly* 9(1-2). (<http://web.africa.ufl.edu/asq/v9/v9i1a2.htm>) (2007年2月10日閲覧)
- マルクス, カール, (1969) 『資本論 (一)』 (エンゲルス編), 岩波文庫.
- Mauss, M., (1990) *The Gift: The Form and Reason for Exchange in Archaic Societies*. London: Routledge.
- 小田亮, (1994) 『構造人類学のフィールド』 世界思想社.
- ポランニー, カール, (1975) 『大転換-市場社会の形成と崩壊』 東洋経済新報社.
- Piot, C., (1991) "Of Persons and Things: Some Reflections on African Spheres of Exchange", *Man* 26(3): 405-424.
- Popkin, S., (1979) *The Rational Peasant: The Political Economy of Rural Society in Vietnam*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Roseberry, W., (1989) "Peasants and the World", In S. Plattner (ed.), *Economic Anthropology*. Stanford: Stanford University Press, pp. 108-126.
- サーリンズ, マーシャル, (1984) 『石器時代の経済学』 山内稔訳, 法政大学出版会.
- Sayer, A. (2004) "Moral Economy", published by the Department of Sociology, Lancaster University, Lancaster LA1 4YL, UK (<http://www.comp.lancs.ac.uk/sociology/papers/sayer-moral-economy.pdf>) (2007年2月10日閲覧)
- 杉村和彦, (2004) 『アフリカ農民の経済』 世界思想社.
- スコット, ジェームス, (1999) 『モラル・エコノミー: 東南アジアの農民反乱と生存維持』 高橋彰訳, 勁草書房.

(Summary)**Market Economy and Moral Economy:
A Dynamic Perspective on the Interaction Between “Selling” and “Sharing”**

Kei'ichiro MATSUMURA

Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University

The purpose of this paper is to suggest a dynamic perspective to understand a complicated economic behavior of farmers in the contemporary rural Africa. I focus on how the farmers' activities of moral economy have a place in a market depended rural society where the cash crop cultivation prevails. By analyzing the concrete cases, I critically examine the antinomy between moral economy and market economy, and indicate the necessity of a dynamic framework on it. It seems that the local farmers behave with making a distinction between “selling” and “sharing” according to the contexts

which consist of the relationships between things, the person and the places. Their behaviors are not necessarily based on the given attribution like cash crops and subsistence crops, but people make crops either as shared wealth or occupied wealth through their interactions. In the current situation of African rural communities, moral economy is neither a strong principal nor a thing of the past. It exists as a different form of action from commodity exchange in the market and it is actualized or negotiated through the peoples' interactions.